

Title	いわゆる様態の助動詞「そうだ」再考：「ようだ」との比較
Sub Title	
Author	大場, 美穂子(Oba, Mihoko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2015
Jtitle	日本語と日本語教育 No.43 (2015. 3) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20150300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いわゆる様態の助動詞「そうだ」再考

—「ようだ」との比較—

大 場 美穂子

1. はじめに

筆者は、大場美穂子(1999)において、いわゆる様態の助動詞「そうだ」¹の意味について考察したことがある。次の例を参照されたい。

(1) 台風 11 号は、今夜半過ぎ、日本列島に上陸しそうだ。

この例で「そうだ」が表すのは、①現在の状況は「台風 11 号が日本列島に上陸する」ということを想起させるほどその状況と接近しており、しかし②「台風 11 号が日本列島に上陸する」という事態が現実になるかどうかはまだ未確定であるということである。このような意味を規定するため、大場(1999)では「そうだ」を以下のように規定した。

「そうだ」: 話し手にとって非現実の事態に接続して、その事態が現実と接近していることを述べる。

その後、「非現実」という表現は分かりにくいという指摘を受けたが、以前の論文でも述べたとおり、この語は「反実的事態」という意味ではなく、「現実であるかどうか(現実になるかどうか)が話し手に確認されていない事態」というほどの意味であり、これまでの諸研究の中で、「未確認」(風間力三 1964)「予想」(田野村忠温 1992)「可能世界」(菊地康人 2000a)と言われてきた考えと同じ方向を示す言葉である。「そうだ」はこのように、①当該事態が現実からすぐに想起されるほど現実近く、しかし、②その事態は話し手にとってはまだ確認されていないものであるということを表すものであると考える。特に①で、なぜ当該事態が現実から想起されるかと

いう点について、当該事態が現実と「極めて近い（接近している）」からであると考えた。

大場（1999）では、さらに①について、現実を直接述べるのではなく現実から想起される事態（現実と近接する事態）をわざわざ引き合いに出して述べることの目的として2つあると考え、それぞれを推量系の用法と描写系の用法として分類した。例えば、

(2) 台風 11 号は、今夜半過ぎ、日本列島に上陸しそうだ。

(3) 棚からかばんが落ちそうだ。

これら2つの例においてはどちらも、現実が「台風 11 号が日本列島に上陸する」ことを想起させたり、「棚からかばんが落ちる」ことを想起させたりするほど当該事態と近いということを表しているが、例 (2) は現実に近い未来について予想する（推量する）という側面が強く、例 (3) は未来について予想するというよりは、今の状態について注意を促す（現実について効果的に描写する）という側面が強い。したがって、それぞれを推量系の用法、描写系の用法として区別した。

従来、「そうだ」が様態の助動詞と呼ばれならわされてきたのは、後者の表現意図（つまり、現実について効果的に描写するという意図）が存在するからに他ならない。そして、このような性格は、助動詞「ようだ」にも共通するものである。それゆえ、先行研究においても、「そうだ」と「ようだ」の違いについて考察される場合が多い²。

本稿では、「そうだ」の意味を再考するとともに、ともに様相を表すとして比較させることが多い「そうだ」と「ようだ」の意味の違いを考察することにしたい。

2. 大場（1999）の概要

大場（1999）では主に「そうだ」の単独終止用法³だけを考察の対象とし、その考察結果に基づいて「そうだ」の意味を次のように規定した。

「そうだ」: 話し手にとって非現実の事態に接続して、その事態が現実と接近していることを述べる。

これは、「そうだ」の用法を以下のように分類したことから導いた結論であった。

	A) 未だ確認していないことである	B) 未だ起こっていないことである	C) 事実と反することを思い描く
推量系の用法	〈推測〉	〈予測〉	
描写系の用法	〈様態〉	〈寸前〉	〈非実〉

以下の例を参照されたい。

- (4) この分では、山沿いでは雪になっていそうだ。〈推測〉
- (5) 来週には法案が成立しそうだ。〈予測〉
- (6) あの人は顔が真っ赤で熱があるらしい。とても苦しそうだ。〈様態〉
- (7) 棚からかばんが落ちそうだ。〈寸前〉
- (8) ここは薄気味悪くて、幽霊でも潜んでいそうだ。〈非実〉
- (9) 悲しみに胸が張り裂けそうだ。〈非実〉

「そうだ」は動詞の連用形（と形容詞語幹）に接続するため、共起する述語の時制に制限がある。例えば、例（4）（6）（8）の「山沿いで雪になっている」「とても苦しい」「幽霊が潜んでいる」という事態は発話時点についてであり、例（5）（7）（9）の「法案が成立する」「かばんが落ちる」「胸が張り裂ける」という事態は発話時以後についてである。つまり、「そうだ」は助動詞「た」に接続することができないため、「そうだ」が表わす事態が発話時以前の事態であるということがない。

それで、上記の分類ではまず、発話時点での事態に言及している場合（表の A）と、発話時以後の事態の成立について言及している場合（表の B）とを分けた。

この A) と B) の中をさらに詳しく見てみると、〈推測〉〈予測〉の 2 つの用法は、（発話時点での事態に言及している場合と発話時以後の事態の成立について言及している場合という時制的な違いがあるものの）ともに

「はっきりとは断言できないがたぶんそうだろう」ということを意味しているという共通点がある。一方、〈様態〉〈寸前〉の用法は、ともに現状を効果的に描写するために、現状とは異なる事態を引き合いに出しているという共通点が存在する。

そこで、この分類基準を十字分類とし、「はっきりとは断言できないがたぶんそうだろう」という意味を表す用法を推量系の用法、現状に対する効果的な描写を目指す用法を描写系の用法とした⁴。

このように用法を分類してみると、〈推測〉〈予測〉〈様態〉〈寸前〉の4つの用法には、①当該の事態は現実と極めて近いという特徴が見られ、また、②しかし、述べられている事態は話し手にとって確認のとれた現実と言うことができないという共通点があるため、大場（1999）は上記のように「そうだ」を規定したのである。

しかしながら、非現実の事態（＝②）を現実に近いものとして述べる（＝①）というように規定しただけでは、それがなぜ推量や現実の描写という意味を持つようになるのかということについては、説明が不十分であった。また、同じように様相の助動詞と呼ばれる「ようだ」との違いを説明するためにも、もう少し詳しい考察が必要である。

そこで本稿では、上記の用法分類に従って、それぞれを「ようだ」と比較しながら、「そうだ」が表す意味について再度考えてみることにする。

3. 「そうだ」と「ようだ」の単独終止用法の比較

ここから、「そうだ」の単独終止用法を「ようだ」と比較することによって、さらに「そうだ」の意味について考察していくこととする。

先にも述べた通り、「そうだ」は動詞連用形（および形容詞語幹）接続の助動詞であるため、表すことができる事態に時制的な制限が存在する。すなわち、「そうだ」は助動詞「た」に接続することができないため、単独終止用法の場合、発話時以前の事態の成立について言及することができない。

したがって、「そうだ」を「ようだ」と比較しようとする場合、「ようだ」のほうも発話時点、発話時以後の事態の成立を表す場合と比較すればよい。

3-1 「ようだ」の単独終止用法の意味

筆者はかつて「ようだ」について考察したことがある（大場 2002）。詳しくは大場（2002）を参照されたいが、その際には、田野村（1991）の分析を受け入れ、「ようだ」を以下のようにした。

「ようだ」：現状が事態 X に見えるということを述べる。

例えば、

(10) 雪が降っているようだ。

この例は、現状が「雪が降っている」という事態に見える（現状が「雪が降っている」という事態相当である）という意味であると考ええる。この場合、例えば、桜の花びらが舞い散る様子（現状）を見てそれが「雪が降っている」という事態に見えると述べる場合（比況）もあれば、部屋が冷え込むことや外出から戻った人の様子（現状）から考えて、「雪が降っている」という事態相当であると述べる場合（推量）もある。いずれにしても、現状が事態 X（＝「雪が降っている」）相当であるという場合に「ようだ」を用いると考える。

3-2 発話時以後の事態成立を表す場合

発話時以後の事態成立を表す用法について「そうだ」と「ようだ」を比較してみよう。まずは、「そうだ」の用例を挙げる。

(11) 来週には法案が成立しそうだ。

(12) (散らかった部屋を見回して) 片づけには時間がかかりそうだ。

(13) (大雪が降って交通機関が混乱するのではないかと天気予報で言っており、遠方にいる同僚が戻ってこられるか分からない状況で) どうやら残りの仕事は私一人でやることになりそうだ。

(14) (陰ながら学費を援助している学生の様子を垣間見て) この分なら立派な

大人になってくれそうだ。

(15) (急な階段を見て) よそ見をしたら足を踏み外してしまいそうだ。

(16) (話の途中で相手がためらって黙り込んだのを見て) どうやら想像以上にひどい話を聞かされそうだ。

(17) 彼の愚痴はまだまだ続きそうだ。

(18) 眠くて、今にも意識を失ってしまいそうだ。

(19) 棚からかばんが落ちそうだ。

上記の例は、大場 (1999) の分析に従えば、「現状がこれから成立する事態 X に極めて近い」ということを「そうだ」が述べているということになる。例えば、例 (19) では、現状が「かばんが落ちる」という事態と近いと述べているわけだが、この場合何と何が近いかと考えると、現状と「かばんが落ちる」という事態とは時間的に極めて近いということになるだろう⁵。しかし、例 (11) の「来週法案が成立する」という事態は現状と時間的に、またはその他の何らかの意味で近いと言うことができるかどうかということになると、大場 (1999) の説明では不十分である。

つまり、発話時の現状と発話時以後に成立する可能性がある事態とが近いとか否かを定めるためには、時間的な基準ではない何かを求める必要がある。そこで本稿では、発話時の現状と発話時以後に成立する可能性がある事態とが近いと考えるためには、現状の中に当該の事態の成立を予想させる「兆し」が存在しなければならないと考えてみることにする。

上記に挙げた例は、どれも現在の状況に当該の事態の成立を予想させる兆しがあるということを示している。例えば、例 (13) では、大雪が降って交通機関が混乱しそうな現在の状況は、「残りの仕事を自分一人でやることになる」という事態の成立を想起させる兆しがあることを示していると言ってよいのではないか。その兆しの存在が現在の状況と当該の事態の近さを保証する。その「兆し」がどの程度認められるかということについては程度差があるし、また、当該の事態が時間的にどのくらい先に成立すると考えているかの見通し⁶についてもさまざまであるが、しかし、現在

の状況の中に当該の事態の成立を想起させる兆しがあるということはどの例にも共通である。

例（13）について、現在の状況の中に「残りの仕事を自分一人でやることになる」兆しがあるということは、別の言い方をすると、現在の状況は「残りの仕事を自分一人でやることになる」という事態と非常に近いところにあると言うこともできるとすれば、大場（1999）で主張された「当該事態が現実と接近している」という主張を維持することができるのではない。

さて、上記の例に「ようだ」を入れ替えるとどうなるだろうか。例えば、以下の例を比較されたい。

（20）眠くて、今にも意識を失ってしまいそうだ。

（21）？？眠くて、今にも意識を失うようだ。

（22）棚からかばんが落ちそうだ。

（23）？？棚からかばんが落ちるようだ。

上の「そうだ」の例を「ようだ」に変えることはできない。また、以下の例では、「そうだ」を「ようだ」に変えると、意味に違いが生じる。

（24）来週には法案が成立しそうだ。

（25）来週には法案が成立するようだ。

（26）（散らかった部屋を見回して）片づけには時間がかかりそうだ。

（27）片づけには時間がかかるようだ。

このような「そうだ」と「ようだ」の意味の違いについて先行研究では次のように述べられている。

「【引用者注：「そうだ」は】ヨウダ、ラシイに比べると、話し手が感覚で捉えた外界の様相、典型的には視覚に映じた様相を直感的に描写的にいう色彩が強く、頭の中で推量するという色彩が最もうすい。」（寺村秀夫 1984: 239）

「先の予想のソウダと、推量のヨウダを比べると、まずソウダのほうは視覚的、直感的に見たままを言うのに対し、ヨウダのほうは、視覚、聴覚その他の感覚により得た情報、あるいは周囲の状況も考慮に入れて推量した結果をいうという違いがある。」（寺村 1984: 243-244）

このような考察は、筆者の内省としても十分首肯できるものであるが、な

ぜこのような違いが生じるのかということについて、本稿の主張に沿って説明すれば次のようになる。

すなわち、「そうだ」を用いた場合には、現在の状況の中に当該事態成立の兆しがあると述べているだけなので、まだ未確定の部分も大きいと言わなければならない⁷。一方、「ようだ」を用いた場合には、現在の状況は当該事態相当と見なされているということであり、そのように判断するためには、単に兆しを感じるという程度では十分ではなく、相当の根拠があり、かなりいろいろ考えた結果であると言っていいだろう。

例 (24) (25) の例で言えば、「そうだ」を用いた場合には、現在の状況の中に「来週法案が成立する」と考える兆しが存在すると言っているのに対して、「ようだ」を用いると、現在の状況が「来週法案が成立する」のと同等の状況であることを述べている。兆しがあると言う場合には、それは未だ「兆し」であって、未確定な部分も多く存在するが、現在の状況が来週の法案成立と同等であると見なすためには、それが不確かなことであるとはいえず、そう判断するだけのかなりの根拠が存在していなければならない。このような「そうだ」と「ようだ」の述べ方の違いが、「そうだ」が直感的であり、「ようだ」がある意味で総合的であるというような用法の違いを生み出しているのではないか。

3-3 発話時点の事態を表す用法

次に、発話時点の事態を表す用法について見てみよう。

- (28) この分では、山沿いでは雪になっていそうだ。
- (29) あの子は顔が真っ赤で熱があるらしい。とても苦しそうだ。
- (30) 彼は何か言いたそうだ。
- (31) あの子は楽しそうだ。
- (32) この餅は、向こうに置いてある餅より固そうだ。
- (33) 彼女は、とても頭がよさそうだ。
- (34) この薬は、まったく効き目がなさそうだ。
- (35) あの子は、悪い人ではなさそうだ。

- (36) (高い階段を見上げて) ビルの 7、8 階分はありそうだ。
 (37) この実験の結果から、仮説が正しかったと言えそうだ。
 (38) この犯罪の裏には、もっと大きな動機が隠されているそうだ。
 (39) この事実はすでに向こうに知れているだろうから、相当な騒ぎになっ
ていそうだ。

これらの例はすべて、現在の状況について話し手が推量して述べていると言っている。例によっては、推量しているというよりも、様子を描写していると言ったほうが適切な例もあるが、いずれにしても、これらが大場（1999）の分析に沿って説明すれば、上記の例はすべて当該の事態が現在の状況に極めて近いということを表しているということになる。ただし、「そうだ」が用いられているということは、それは現状そのものではないのであり、現状と当該事態との「近さ」は、近くてもあくまで別の事態である（つまり現状そのものではない）ということを保証する。

ただし、現実とは言えない事態について述べるのがなぜ推量や描写につながるかと言えば、大場（1999）の分析からでは、現状と当該の事態が極めて近いからとしか言えない。やはりもう少し詳しい説明が求められよう。

本稿では、現実とは言えず、しかし、発話時に存在する可能性がある事態と現実との間の近さを保証するものについて、現在の状況の中に話し手がそう思うだけの徴（特徴）が備わっているという点に求めたい。

例えば、例（32）を参照されたい。大場（1999）の分析に従えば、「そうだ」が述べているのは、「この餅が向こうにある餅より固い」という事態は現実に確かめた事柄ではないが、現実に極めて近いものであるということになる。ただし、「この餅が向こうにある餅より固い」ということが確かめられたわけではないのに、それが現実に極めて近いと保証できるのは、目の前にある餅には、「向こうに置いてある餅より固い」と判断できるだけの特徴が備わっているからだと考えるのである。

このように考えれば、大場（1999）の「そうだ」は「事態が現実と接近し

ている」ことを述べるという主張を維持できるのではないか。

さて、これらの「そうだ」の例を「ようだ」に言い換えてみると、意味が多少異なってくる。例えば、

- (40) 彼は何か言いたそうだ。
- (41) 彼は何か言いたいようだ。
- (42) この薬は、まったく効き目がなさそうだ。
- (43) この薬は、まったく効き目がないようだ。

この二つの例の違いについて、先行研究では、先に引用した寺村（1984）の他に、以下のように指摘されている。

「【引用者注：「そうだ」は】〈現実〉として確認されてしまったことには使えないのに対し、ヨウダは〈現実〉を〈現実〉としたまま不確かなことを述べる【中略】のである。」（菊地 2000: 56）

「(i) ヨウダは何らかの形で話し手が確認した現実の事柄についてそのありさまを述べる場合に用いられる。(ii) ソウダは想像上の事柄あるいは非現実の事柄を含め、未確認の事柄についてそのありさまを述べる場合に用いられる。」（中畠 1991: 31）

つまり、「そうだ」は現実について未確認である場合に用いられるのに対して、「ようだ」は確認してしまった後でも用いることができるということである。

これについて、本稿の分析に沿って述べれば、「そうだ」は、あくまで現実と近いことについて述べる形式であって、それは現実である場合には決して用いることができないが、「ようだ」は現実と相当すると述べているのであるから、それが現実であっても、また、まだ未確認であっても話し手が現実相当であると見なすことができれば特に問題はないということである。

3-4 「そうだ」の非実用法と「ようだ」の比況用法

「そうだ」の用法には、これまで検討してきたような用法の他に、話し手が現実である（現実になる）とは思っていない事態を述べる、大場（1999）で〈非実〉と名付けた用法がある。この用法は、「ようだ」の比況の

用法と、話し手が現実である（現実になる）とは思っていない事態について述べるという共通点があるため、ここで比較し、違いについて述べておきたい。「そうだ」の〈非実〉の例を挙げよう。

- (44) ここは薄気味悪くて、幽霊でも潜んでいそうだ。
- (45) この屋敷の警備はとても厳重で、ゲームに出てくる伝説の秘宝でも隠してありそうだ。
- (46) 悲しみて胸が張り裂けそうだ。
- (47) (細かい作業を長時間続けていて) 神経がすり減ってしまいそうだ。
- (48) 窓の隙間から寒風が吹きこみ、中の空気は凍りついてしまいそうだ。
- (49) この地下室は、恐ろしく寒くて、骨がどうにかなってしまいそうだ。
- (50) あなたを失うかと思うと、胸がつぶれそうだ。
- (51) あの人に今すぐ会えなければ、気が狂ってしまいそうだ。

〈非実〉の用法は、例 (44) (45) のように現在の状況について述べる場合もあるが、多くの場合にはここに挙げたように、現在のような状況が続けば、このようになってしまってもおかしくないと思うというようなことを述べる例が多い。

ただし、このような例については、話し手が実際にそのような事態が起こると信じているわけではなく、例えば、例 (46) では、実際に「胸が張り裂ける」と考えているのではなく、現在の悲しい状況が「胸が張り裂ける」という（架空の）事態と極めて近いと述べているにすぎない。つまり、現実として「胸が張り裂ける」という事態が成立すると話し手が考えるかどうかは、「そうだ」の意味に含まれない。「そうだ」は「悲しい」とことと「胸が張り裂ける」とこととが極めて近い関係にあると言っているのであり、それはまた、ある意味で、「悲しい」状態の中に、「胸が張り裂ける」のではないかと思えるような兆しが存在するということでもある。

このような例を「ようだ」の比況の用法と比較してみよう。

- (52) ここは薄気味悪くて、幽霊でも潜んでいそうだ。
- (53) ここは薄気味悪くて、幽霊でも潜んでいるようだ。
- (54) 悲しみて胸が張り裂けそうだ。

(55) 悲しみに胸が張り裂けるようだ。

本稿の分析に沿って説明すれば、例 (52) は現在の薄気味悪いという状況の中に「幽霊が潜んでいる」と考えられるような兆しがあるという意味を表し、例 (53) では、現在の薄気味悪い状況が「幽霊が潜んでいる」という状況相当であると述べているということになる。述べ方としては、「そうだ」は「兆しがある」という述べ方であり、「ようだ」は当該事態相当であるという述べ方ではあるが、しかし、話し手が、当該事態が現実には起こり得ないと考えている場合には、両者の意味の違いは明確には現れない。このような事情は、例 (54) (55) についても同様である。

3-5 「そうだ」と「ようだ」の比較から

以上、「そうだ」と「ようだ」の用法を比較した。その結果、「そうだ」の単独終止用法の意味の記述に際しては、「当該の事態が現実に極めて近い」ということを表すと言っただけでは不十分であるということが分かった。「当該の事態が現実に極めて近い」と判断する根拠は、現実の中に、当該の事態を想起させる「兆し」または「徴」が存在するという点であるということを指摘しておく必要がある。このような指摘をすることによって、従来、様相の助動詞として並べられてきた「そうだ」と「ようだ」の違いを説明できるようになるとともに、「そうだ」がなぜ描写の意味を表すことができるかということも説明できるようになる。

つまり、「そうだ」が描写の用法を持つのは、現実の中にその事態を想起させる兆し、徴が存在するからである。

4. 「そうだ」の非終止用法

さて、これまで「そうだ」の単独終止用法に限って「ようだ」との比較を行ってきたが、「そうだ」の非終止用法⁸は、従来から言われてきたように単独終止用法とは意味的に多少の違いがある。大場（1999）では単独終止

用法に限って考察したが、今回は非終止用法についても少し見ておくこととする。すべてを扱う準備がないので、「そうだった」という「そうだ」に助動詞「た」が下接した場合と、「そうだ」の連体用法についてのみ見て行く。

4-1 「そうだった」の用法

単独終止用法においては、現在の状況と近い事態を述べるということだったが、「そうだった」ということになる、現在の状況ではなく、発話時点以前の状況が当該事態と接近しているということになる。

(56) 外に出てみると、雨が降りそうだった。

(57) あまりに眠くて、すぐにでも意識を失ってしまいそうだった。

(58) 窓の外から店の中を覗いていて、彼は中に入ってみたそうだった。

例(56)は、現在の状況を問題にしているのではなくて、発話時以前(＝外に出てみた時点)の状況に「雨が降る」と思わせる兆しがあったことを述べているのである。

これを単独終止用法と比較した場合、例えば、

(59) (空を見上げて) 雨が降りそうだ。

(60) 外に出てみると、雨が降りそうだった。

例(59)は、現在の空の状況を描写しているとも、これからの状況を推量しているとも両者の解釈が可能であるのに対して、例(60)は、この時点以後について推量しているという解釈よりも、その時の空の状況について「雨が降る」ということを予想させる兆しが存在していたというようなその時点での空の状況を描写しているという解釈に圧倒的に傾く。

すなわち、「そうだ」と「そうだった」を比較した場合、推量というよりも描写の意味のほうに傾くと言えそうである。

この理由については、次のように述べておきたい。文末という構文的な位置は、話し手の発話時の判断を述べるという意味が強く出る位置であるということが言えるであろう。それは、いわゆる不変化詞が話し手の主観

を述べる形式であるという指摘と呼応するものである。

「そうだ」が持つ用法のうち、推量系の用法は、描写系の用法と比較すると、「話し手の発話時の判断」という側面が極めて卓越した用法である。したがって、助動詞「た」が下接した場合には、発話時を離れることになるため、「話し手の発話時の判断」という意味は失われ、その結果、推量系の用法ではなく、描写系の用法として用いられるようになるとしても、不思議はないと思われる。

推量という意味と時制との関係で述べれば上のような説明が可能であろうが、もう少し具体的な説明も可能であろう。例えば例(60)について見てみると、外に出てみた時点では、それ以後雨が降るかどうかはまだ分からないが、しかし発話時には、結局降ったかどうかは判明しているということも多い。そのような状況でわざわざ「それ以後に雨が降ると思った」ということを述べるというのは、情報量という意味で考えると、次の二つの場合にだけ有効だということができるのではないか。すなわち、一つは、「それ以後に雨が降ると思ったが、実際には降らなかった」という場合であり、もう一つは、「その時点での状況がそれ以後に雨が降ると思わせる兆しを示していた」という場合である。つまり、その二つの場合は、「推量したがその推量が外れた場合」と、「その時点での状況を描写する場合」の二つである。

ここでは、「そうだった」が「そうだ」と比較すると、「話し手の判断」という意味が薄れて、推量したがその推量どおりにはならなかったという意味か、その時点での状況を描写するという意味に傾くということを述べた。

4-2 「そうだ」の連体用法

次に、「そうだ」の連体用法についてごく簡単に見ておきたい。

(61) 犯人が立ち寄りそうな店をしらみつぶしに探す。

(62) 頭のよい彼が、すぐにばれそうな嘘をつくには何か理由があるのではない

か。

(63) 当社には余裕がないから、即戦力になりそうな人を採用しなければならない。

(64) まったくその気のなさ そうな息子を旅行に引っ張って行った。

(65) 彼は不機嫌 そうな表情を浮かべている。

(66) 雪が降りそうな雲行きになってきた。

(67) この中から、救助に役に立ち そんなものがあれば、どれでも持って行きなさい。

(68) 通りを歩いて見ると、治安が悪 そんな町であった。

(69) 部屋に入ると、骨まで凍り そんな冷氣が漂っていた。

(70) その青年はいかにもソツのなさ そんな、さわやかな相貌であった。

(71) その話は、いかにも彼が言いだし そんなことだ。

(72) その女性は、決まり悪 そんな顔で笑った。

連体用法は、例えば例(61)のように、「犯人が立ち寄りそうだ」という推量の意味を持っていると言ってよい場合も多いが、単独終止用法と異なるのは、その意味を後でキャンセル可能であるという点である。

(73) ??その店に犯人が立ち寄り そうだ。しかし、犯人はその店に立ち寄らないと思う。

(74) 犯人が立ち寄り そんな店を当たったが、犯人が立ち寄った形跡はない。

「そうだ」の連体用法は、話し手がそのような推量をしたということを表すというよりは、当該の事態を想起させる「兆し」「徴」が存在するということを述べるだけにとどまる場合が多いということをここで指摘しておきたい。

4-3 単独終止用法と非終止用法との違い

ここまで、「そうだった」および「そうだ」の連体用法についてごく簡単に見たが、ここで言えるのは、単独終止用法と非終止用法を比較すると、非終止用法は、話し手の事態に対する判断という意味から離れ、当該事態を想起させる兆し、徴が存在することを述べるに留まる場合が多くなるということである。

5. 「そうだ」の意味再考

以上、検討してきたことから、次のことが言える。

大場（1999）では、「そうだ」が推量系の用法と描写系の用法を持つことから、次の3つの方向性を検討した。

- (1) 「そうだ」はもともと推量の意味を表す助動詞であるが、それが条件下では描写の用法を持つようになる。
- (2) 「そうだ」はもともと描写の意味を表す助動詞であるが、それが条件下では推量の用法を持つようになる。
- (3) 「そうだ」はもともと推量とも描写とも異なる意味を表す助動詞であるが、それが条件下では推量の用法を持つようになり、また別の条件下では描写の用法を持つようになる。

検討の結果、大場（1999）では、(3) の立場を採用した。しかし、今回、非終止用法について少し見た結果は、(2) の方向を示唆しているように思われる。

すなわち、単独終止用法という文末の位置は、話し手による事態に対する判断を運びやすい位置であると言える。要するに、文末というのは推量という意味の現れやすい位置であるということができる。

一方、非終止用法を検討してみると、「そうだ」の用法は圧倒的に描写系の用法に傾く。そうであるとすれば、「そうだ」のもともとの意味は描写系の意味であり、文末という構文的位置に置かれることによって推量という意味を運びやすくなると考える可能性が出てくるのである。

ここに、本稿での「そうだ」の意味の検討の結果を記しておきたい。

本稿でも、大場（1999）で提案した「そうだ」の単独終止用法の以下のような規定は妥当であると考ええる。

「**そうだ**」：話し手にとって非現実の事態に接続して、その事態が現実と接近していることを述べる。

ただし、「当該事態が現実と接近している」という判断は、現実の中に当該事態を想起させる兆し、徴が存在しているという点に担保されている。こ

の点についての詳しい言及がなかったことは大場（1999）の不備であった。

また、単独終止用法という文末の位置では、話し手の事態に対する判断という意味を帯びやすいということができ、そのため、単独終止用法においては、推量系の用法に用いられやすいということができるが、非終止用法においては、「そうだ」は圧倒的に描写系の用法に傾いて行く。このことから、「そうだ」を上記のように規定するのは、「そうだ」をもともと描写を表す助動詞であると規定することになると考え直す余地がある。

6. おわりに

以上、助動詞「そうだ」の意味を「ようだ」との比較を通して再度考察した。いまだ検討しきれない点も多く、不十分ではあるが今回はこれを一応の結果としたい。

【注】

- 1 本稿は、いわゆる様態の助動詞「そうだ」のみを扱い、伝聞の助動詞「そうだ」については扱わない。そこで以下では、様態の助動詞「そうだ」を単に「そうだ」と表記することにする。
- 2 寺村秀夫（1984）、中畠孝幸（1991）、田野村忠温（1992）、菊地康人（2000b）、杉村泰（2000）、中村亘（2000）など多数。
- 3 他の助動詞が下接することなく、文末に用いられる用法。
- 4 〈非実〉の用法についても、事態の成立時点という観点で見れば、例（8）のように発話時点の事態に言及する用法と例（9）のように発話時以後の事態の成立に言及する用法とが区別できる。ただし、このような例は、表現意図という観点から考えれば、話し手が実際に「幽霊が潜んでいる」とか「胸が張り裂ける」という事態が現実起こるというようなことを想定していない。つまり、「たぶんそうだろう」という意味を表す推量系の用法ではありえず、すべてが現状について効果的に表現するということを目指していると考えられるため、C）として別扱いにしてある。
- 5 この時間的な近さについては、従来、「そうだ」の用法の一つとして「切迫」「寸前」などという用法が立てられていることに現れている。また、「そうだ」の意味全般にこのような意味を認める分析では、菊地（2000a）は「次の絵」という比喩的な表現を用いているし、木下りか（2001）では、「今生起してい

る事態」と「連続して生起する事態」という関係を「隣接関係」としてとらえられた一つであるとしている。

- 6 例えば、例 (11) (19) を比較すると、「法案が成立する」のは来週で、成立までにはまだ時間がかかると見られるが、「かばんが落ちる」というのはもう今すぐにも落ちるのではないかということを表す。このように、事態が成立すると予想されるまでの時間はさまざまであるが、現在の状況の中に事態成立の「兆し」が存在するということは共通であると言える。
- 7 しかも「そうだ」を用いる場合には、未確定でなければならない。
- 8 単独で文末に用いられる場合以外を指す。具体的には、「そうだ」に助動詞「た」が下接した場合（「そうだった」）、連体節の中に入っている場合の2つを指す。

参考文献

- 大場美穂子 (1999) 「いわゆる様態の助動詞「そうだ」の意味と用法」『東京大学留学生センター紀要』9 pp. 75-99 東京大学留学生センター
- 大場美穂子 (2002) 「日本語の助動詞「ようだ」と「らしい」の違いについて」『マテシス・ウニウエルサリス』3-2 pp. 99-114 獨協大学外国語学部言語文化学科
- 風間力三 (1964) 「「死にそうだ」と「死ぬようだ」」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- 菊地康人 (2000a) 「いわゆる様態の「そうだ」の基本的意味 —あわせて、その否定形の意味の差について—」『日本語教育』107 pp. 16-25 日本語教育学会
- 菊地康人 (2000b) 「「ようだ」と「らしい」 —「そうだ」「だろう」との比較も含めて—」『国語学』51-1 pp. 46-60 国語学会
- 木下りか (2001) 「事態の隣接関係と様態のソウダ」『日本語文法』1 pp. 137-158 日本語文法学会
- 杉村泰 (2000) 「ヨウダとソウダの主観性」『言語文化論集』22-1 pp. 85-100 名古屋大学言語文化部国際言語文化研究科
- 田野村忠温 (1991) 「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10 pp. 62-78 京都大学言語学研究会
- 田野村忠温 (1992) 「現代語における予想の「そうだ」の意味について —「ようだ」との対比を含めて—」『国語語彙史の研究』12 横組 pp. 1-20 和泉書院
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 中畠孝幸 (1991) 「不確かな様相 —ヨウダとソウダ—」『三重大学日本語学文学』2 pp. 26-33
- 中村亘 (2000) 「「ようだ」「らしい」「そうだ」をめぐる —事態の捉え方の違いという視点から—」『早稲田大学日本語研究』8 横組 pp. 13-24 早稲田大学国語学会